

○ 波止場

漁船がたくさん停泊している。

一隅に腰をおろして、寅とリリーがいる。

寅 「故郷はどこだい」

リリー 「故郷……」

寅 「うん」

リリー 「それがね、ないね、私……生まれたのは東京らしいけど、中学校の頃から家を出てフーテンみたいになっちゃってたから」

寅 「……そうかい」

リリー 「兄さんはどこな故郷は」

寅 「へえー、ちよいとした俺だね……流れ流れの渡り鳥か……」

リリー 「(歌う) ナーガーレナガーレーノ渡り鳥……か」

二人がボンヤリ見るその視線の先に、女房子供と談笑する船員の姿がある。

入船する船。

リリー、船に向かって叫ぶ。

リリー 「おい お帰り〜」

赤みのさして来た空を舞うかもめ。

寅 「……どうしたい、きのうは泣いてたじゃないか」

リリー 「(笑って) あら、見てたの、嫌だ」

寅 「何かつらいことでもあるのか？」

リリー 「別に……ただ何となく泣いちゃったのさ」

寅 「何となく？」

リリー 「うん、兄いさんなんかそんなことないかな……夜汽車に乗っててさ、外見てるだろ、そうすると何もないまっ暗な畑の中に、ポツンと灯りがついていて、ああこんな所にも人が住んでるんだなアって、そう思うと何となく悲しくなって涙が出ちゃいそうになる時って、ないかい」

寅 「うん、こんなちっちゃな灯りが遠くの方へスーッと遠ざかって行ってな……あの灯りの下には茶の間かな、もう遅いから子供たちは寝ちまって、父ちゃん母ちゃんが二人でしけたセンベイでも食いながら紡績工場に働きに行った娘

のことを話しているんだ、心配して……暗い外を見てそんなことを考えていると汽笛がポーツと聞こえてよ。なんだかふーっと涙が出ちゃうなんてそんなことは……分かるよ」

寅、ふと眼を潤ませ口をつぐむ。

うっとり聞いているリリー。

先ほど談笑していたの船員が漁船に乗って岸壁の女房子供たちに何か叫んでいる。

寅 「父ちゃんはお出かけか……」

その姿を見つめていたリリーがポツリと、

リリー 「ねえ」

寅 「う？」

リリー 「私たちがみたいな生活ってさ、普通の人とは違うのよね。

それもいい方じゃなくて、何ていうかな、あってもなくてももどうでもいいみたいなの……つまりさ、あぶくみみたいなもんだね」

寅 「うん、あぶくだ、それも上等なあぶくじゃねえよな、風呂の中でコイた屁じゃないけど背中の方へまわってパチンだ」

リリー、笑う。

寅 「おかしいか」

リリー 「面白いなお兄さん」

リリー、辺りの夕暮れに気づき、

リリー 「いま何時？……あ、ソロソロ商売にかかなくなっちゃ」

寅 「行くのかい？」

リリー 「うん、じゃまたどっかで会おうよ」

寅 「日本の何処かでな」

リリー 「うん、じゃあね」

と立ち上がり、

リリー 「兄いさん、何て名前？」

寅 「俺かい、俺はな、葛飾柴又の車寅次郎よ」

リリー 「車寅次郎……じゃ、寅さん？」

寅 「うん」

リリー 「いい名前だね」

リリース、くるりと踵きびすを返すと急ぎ足で立ち去る。
夕日を浴びたその後姿が消えて行く。

寅 「……あぶくか」